

# 孤高の画家 故北島忠喜

# 友、自宅に専用画廊

名声には無関心で、野の花や石ころを愛し、一筆一筆に生命感あふれる作品を描き続けた北島忠喜という画家が小浜市にいた。没後3年。友人が市内の自宅を専用ギャラリーに改装した「北島忠喜の絵画館」も開

## 小浜で3周年

館3周年を迎えた。埋もれた「本物の画家」をもっと知ってほしいと今年から展示替えした。年内には北島さんの故郷での「里帰り展」も企画されている。

(土岐直彦)



代表作「輪廻転生」を前に北島忠喜さんを振り返る内藤さん夫妻＝小浜市小浜広峰で

北島さんは秋田県出身で武蔵野美術大卒。35年前ごろ、結婚を機に妻の故郷の小浜市に移り住んだ。絵一筋の不器用な性格。妻の実家は家具店だったが商売には向かず、精神的にも苦勞した。夜、倉庫のような所で一心にカンバスに向かう時、「これで明日も生きられる」と思った、という。

## ●自身と対話

「人に見せるために絵を描くのではない。いかに純粹に自分自身と向き合い、その思いを表現するか。自分が惹かれたものを宝石のように描きたい」。こう語った北島さんは作品を一度も公募展には出品せず、まして売ることなかった。



03年12月、絵画館オープンの日、北島忠喜さん(内藤悦子さん提供)

## 今年「里帰り展」秋田で年内に「里帰り展」

本質的な力を知る東京の画家の友人からは「作品を送って」と言われ続けた。飾らない作品の魅力はじわじわ知られた。「多くの市民に見てもらおう場を」と03年12月、常設展示する絵画館を開いたのは元会社員の内藤彰さん(61)と元市職員の内藤悦子さん(61)。同市小浜広峰の自宅1階約50平方メートルを改装、無料のギャラリーとして提供した。

## ●命への思い

常時、約20点を展示している。代表作は、15年かけて仕上げた300号の大作「輪廻転生」。永遠の宇宙のような空間に男女と子どもが描かれ、命への限りない思いがこもる油彩だ。深い青や漆黒の背景にたえずむよな1隻の廃船は、海辺だった故郷の追憶か。好きだった若狭の海の落日、春の光景……。小浜で取れるタイやカレイの作品にはごつごつした魅力と繊細さの両面を見せる。

北島さんだが、開館後一月もたたないうちに急逝する。62歳だった。その15年ほど前に最愛の妻が病死、塗りばしの工員をしながら3人の子どもを育てる苦勞もいとわなかった。晩年はわずかな年金を頼りに1人で生活し、最後は孤独の中で愛した酒が命を削った。

## ●生そのもの

内藤夫妻は「絵を描くことが生きることそのものだった人。自分を良く思われないとも思わない。そんな彼の作品に励まされたという人は少なくない」と振り返る。

作家の故水上勉の作品の挿絵を手がけたおおい町の画家で、北島さんと親交があった渡辺淳さん(75)は「吐く息が感じられるような純粋な絵。私がかたわななものを持っていた惜しい人だった。小浜の隠れた財産だ」と話す。

新年、北島さんの故郷、秋田県にかほ市(旧金浦町)から、作品を受納し、年内にも里帰り展を開きたいとの話が舞い込んだ。同市教委は「良い作品。構想中の総合文化施設でも展示を検討し、地元出身の画家を市民に知ってもらいたい」という。内藤夫妻と彼を慕う小浜の画家2人とが昨秋、生地を訪ねたことがきっかけとなった。

絵画館は美術館がない小浜市では唯一、美術鑑賞できる場だが、知らない市民が多い。「絵を見る力が養える。多くの人に来館を」と呼びかけている。絵画館(0770・52・2879)は原則、午後1〜5時開館。水曜休館。